

中学時代に壮絶ないじめに遭ったという落語家の林家染太さんが5月29日、県庁で自身の体験を基に講演。いじめをなくすため、いじめられている子を救うために、大人の意識改革、見守りの重要性を訴えた。いじめ対策の一環で県などが主催した。以下は講演要旨。

# SOS聞き逃さないで

## 自らの「壮絶な体験」披露

中学時代、僕は人見知りで、校に行くのが嫌で嫌で仕方なく暗かった。不良グループに目を付けられ、壮絶ないじめの的になった。放課後、呼び出した。精神的に参っていた。大を食らい、殴られたり、教科書を破られたり、学生服を切られたり、靴を捨てられたり、トイレに入っていたらバケツで水をかけられたり……

今思い出すと胸が苦しくなる。大人になって、会社などでいじめに遭ったら、弁護士に相談したり、会社を辞めたりと対処法はいろいろあるだろう。中学生には学校が人生の全てで、逃げる事ができない。また、いじめられている子の多くは自分がいじめられていることを他人に言えない。報復を恐れたり、自分のプライドが傷ついたりするからだ。親に迷惑をかけたらあかんとも思ってしまう。

大人になって、会社などでいじめに遭ったら、弁護士に相談したり、会社を辞めたりと対処法はいろいろあるだろう。中学生には学校が人生の全てで、逃げる事ができない。また、いじめられている子の多くは自分がいじめられていることを他人に言えない。報復を恐れたり、自分のプライドが傷ついたりするからだ。親に迷惑をかけたらあかんとも思ってしまう。



「学校に行かなくていいから死なないで」と訴える林家染太さん

はやしや・そめた氏 1975年生まれ。松山市出身。関西大卒業後の2000年、四代目林家染丸に入門。各地の落語会、テレビ、ラジオで活躍中。英語落語も得意で、海外で公演している。いじめ体験を基に、いじめ防止の講演も精力的に行う。

山形 4/3

## 「人それぞれに違い」まず認め合う

は、ものすごく孤独ということ。世界で自分一人しかないなという孤独感をすごく感じる。中学生はメンタルが弱い。こういう状況に対処することはいじめをなくすことではない。

ただ、僕は考えた。「なんでも、こんなやつのために、僕は死ななアカンねん」と。最低ないじめっ子のために、自分の人生を捨てるのは嫌だった。生き延びようと思った。悩んで悩んで、自殺はやめ、学校をやる休みしようと考えた。死ぬよりはましだと思っ

た。個人的には、僕は、学校は苦しくて苦しくて苦しくてまで行くところではないと思

う。我慢や忍耐は大事だが、それは精神的にも体力的にも充実している時に言える話。いじめられている子にとって、一刻を争う問題で、逃げ場所をつくってあげなければいけない。休むのを繰り返すうちに、親に聞いた話、僕は全部吐き出した。両親も泣いた。親と先生が話し合い、きちんと対応してくれて、いじめがなくなりました。

地域の人たちは、しっかりと見てあげてほしい。子どもには対処できないのだ。声なき声が、SOSが聞こえてくる。これを聞き逃すからああいう自殺が出てくる。

一方、いじめている子はどういう心理なのか。いじめていない側にはいじめている認識がない。大人があなたがやっ

ていることは犯罪だ。人として非常にひどいことだ。ということもきちんと教えてあげ

るべきだ。地域も親も先生もしっかりとやっていると思うが、もっと見てあげてほしい。

まずはわれわれの意識改革が大事だ。自分と考えや行動が違う人、ことも認める。例えば、街で、ええ年のおばちゃんやミニスカートをはいてたりすると、ちよつと見下すことがないか。そういう時、「私は違うけど、そんなもんも、ありちゃうか」と、人それぞれ違うことを認める気持ちが大事だ。大人も飲み交わさず、その場にいらない人の悪口や陰口で盛り上がるのをやめませんか。大人は、「いじめをやめよう」と言うが、子どもは見てますよ。「ほな、大人はどないやねん」と。